

平成28年度

京都府学力診断テストの結果の概要について



平成28年7月15日
学 校 教 育 課

- ◎ 実施日 平成28年4月11日（月）～15日（金）
- ◎ 実施対象 府内全小学校（209校） 特別支援学校初等部（2校）の第4学年
府内全中学校（97校） 特別支援学校中等部（2校）の第1学年
- ◎ 実施教科及び受検者数 小学校第4学年 国語 10,248人 算数 10,245人
中学校第1学年 国語 9,859人 数学（算数） 9,863人
- ◎ 問題内容及び問題数
 - 学力調査
 - ・ 基礎・基本に関する問題 …… 20問
 - ・ 活用に関する問題 …… 5問
 - 質問紙調査 小学校第4学年 …… 48問（学校独自2問 計50問）
中学校第1学年 …… 49問（学校独自2問 計51問）

平成28年度京都府学力診断テストを実施しました。学力調査と質問紙調査の結果について概要を報告します。

今年度の状況

◆ **学力については、小学校4年、中学校1年ともに概ね定着しているが、一部の領域に課題が見られる。**

＜小学校4年＞

◆ 国語、算数ともに基礎・基本の問題は定着している。活用の問題については、一定の定着は見られるが、国語については、まだ課題も見られる。領域別では国語の「読むこと」に課題が見られる。算数では、各領域とも定着が見られる。

＜中学校1年＞

◆ 国語、数学（算数）ともに基礎・基本の問題は、定着している。活用の問題については、依然課題が見られる。領域別では、国語の「読むこと」に課題が見られる。数学（算数）では、「数と計算」は、定着しているが、「量と測定」と「図形」に課題が見られる。また、「数量関係」の一部に課題が見られる。

前年度との比較

◆ **正答数の相対度数分布からは、学力低位層の割合が減少し、改善傾向が見られる。**

前年度の正答数の相対度数分布と今年度の正答数の相対度数分布を比較すると、小学校4年国語と中学校1年数学において、学力低位層が減少した。

◆ **家で学校の宿題をしている児童生徒の割合は9割を越えている。また、学校の授業時間以外の勉強時間については、中学校1年では改善傾向が見られる。**

「家で学校の宿題をしていますか」（質問番号14.15）という質問に対して、「している」「どちらかといえば、している」と肯定的に回答している児童生徒の割合は、小学校4年で97.2%（H27:96.7%）、中学校1年で94.9%（H27:94.8%）である。

「学校の授業時間以外に、ふだん、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」（質問番号19.20）という質問に対して、「30分より少なかった」「全くしなかった」と回答している児童生徒の割合は、小学校4年で19.8%（H27:18.3%）、中学校1年で14.5%（H27:16.6%）である。勉強時間が30分未満の児童は小学校4年では1.5ポイント増加し、中学校1年では2.1ポイント減少した。

◆ **自分だけの携帯電話やスマートフォンを持っている児童生徒の割合が増え、使用時間も増えている。**

「自分だけの携帯電話やスマートフォンを持っていますか」（質問番号29.30）という質問に対して「持っている」と回答している児童生徒の割合は、小学校4年で39.7%（H27:38.6%）、中学校1年で55.9%（H27:51.1%）である。自分だけの携帯電話やスマートフォンを持っている児童生徒は、小学校4年では、1.1ポイント増加し、中学校1年では、4.8ポイント増加した。

「ふだん、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをしますか」（質問番号28.29）という質問に対して、「全くしない」と回答した児童生徒の割合は、小学校4年で55.9%（H27:56.8%）、中学校1年で28.5%（H27:32.5%）である。携帯電話等の使用時間は、小学校、中学校ともに増加した。

改善プラン ～指導を強化する事項～

★ 基礎・基本の定着

小中連携の視点での結果の活用を効果的に行い、組織的な授業改善や一人一人の学力状況に応じた指導の充実を図る。

★ 学習習慣の定着

予習・復習を中心とした主体的な学習習慣が身に付くように、取組を充実、推進させる。

★ 主体的・協働的な学びの充実

見通しを立てて、主体的・協働的に課題の発見・解決に取り組み、振り返る学習過程を大切にし、さらに指導方法を改善する。

★ 携帯電話やスマートフォンの正しい使い方

携帯電話やスマートフォンに潜む危険性や正しい使い方等について、児童生徒の理解を深めさせるとともに保護者への啓発を図る。

★ 「京都府学力診断テスト活用講座」を実施【7月11日・12日・14日】

・診断テストの概要について ・成果と課題、授業改善の視点について

今年度新たに設定した質問

○授業のはじめに目標（めあて・ねらい）が示されていた。（3）

○授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていた。（4）

○家で、学校の授業の予習をしていますか。（16・17）

○家で、学校の授業の復習をしていますか。（17・18）

○土曜日や日曜日など学校の休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。
（塾、家庭教師を含む）（20・21）

○土曜日の午前は何をして過ごすことが多いですか。（30・31）

○学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか。（32・33）

○友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか。（33・34）

○友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。（34・35）

○今住んでいる地域の行事に参加している。（44・45）

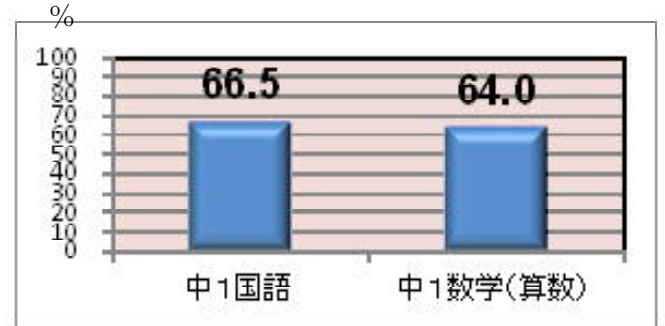
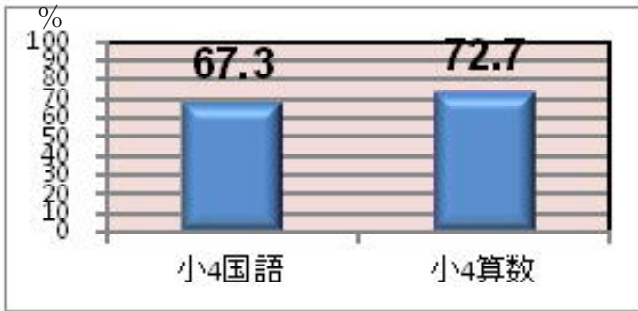
※（ ）内の番号は資料2の質問紙調査の質問番号（小4・中1）です。

1 学力調査の状況

(1) 京都府総合

資料1

※数値はすべて正答率(100%)

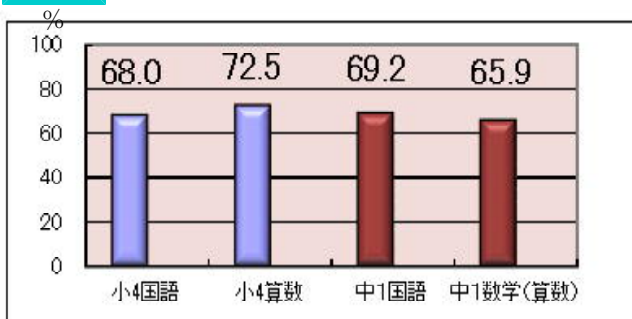


※小学4年、中学1年ともに学力は概ね定着しているといえる。

(2) 教育局別

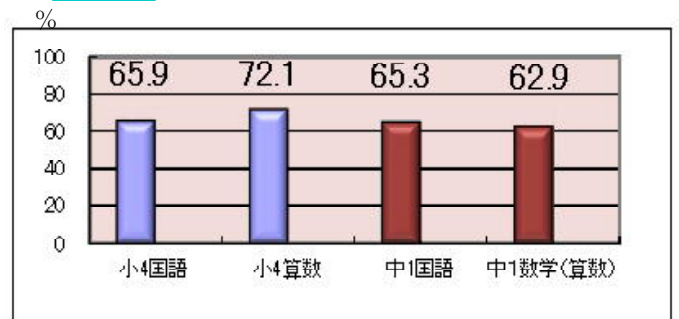
乙訓

(小18校・中8校)



山城

(小77校・中35校)

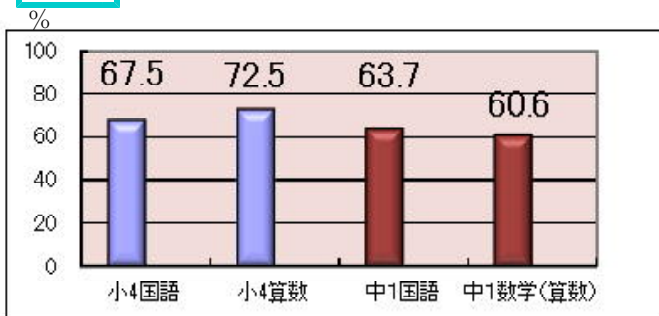


小4年国語(1390人 13.6%) 算数(1390人 13.6%)
中1年国語(1275人 12.9%) 数学(算数)(1275人 12.9%)

小4年国語(5272人 51.4%) 算数(5268人 51.4%)
中1年国語(4823人 48.9%) 数学(算数)(4827人 48.9%)

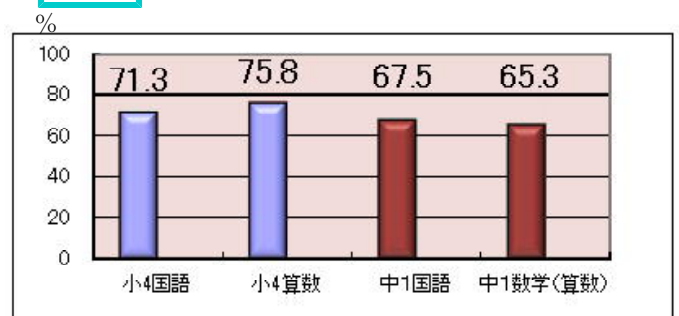
南丹

(小30校・中15校)



中丹

(小49校・中22校)

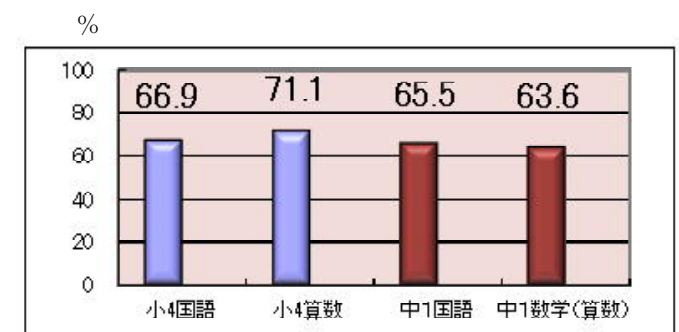


小4年国語(1090人 10.6%) 算数(1090人 10.6%)
中1年国語(1095人 11.1%) 数学(算数)(1095人 11.1%)

小4年国語(1739人 17.0%) 算数(1739人 17.0%)
中1年国語(1677人 17.0%) 数学(算数)(1677人 17.0%)

丹後

(小35校・中13校)

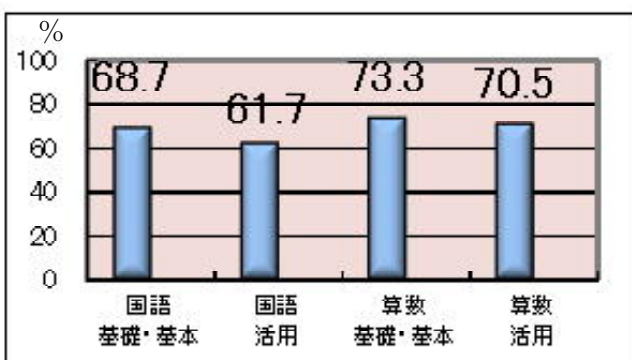


小4年国語(755人 7.4%) 算数(756人 7.4%)
中1年国語(824人 8.4%) 数学(算数)(824人 8.4%)

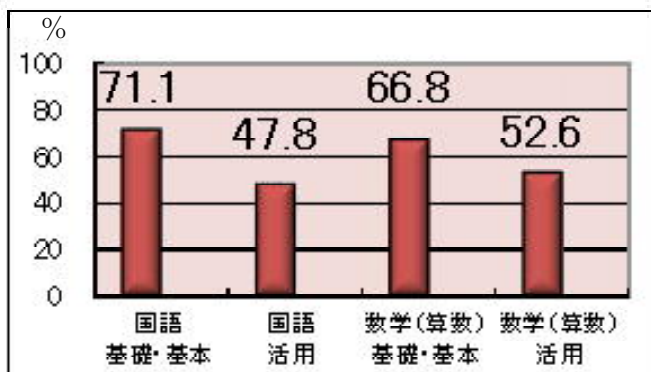
()は、(受検者数 府全体の受検者数に占める割合)を表す。

(3) 問題別（基礎・基本に関する問題 活用にに関する問題）

小学4年



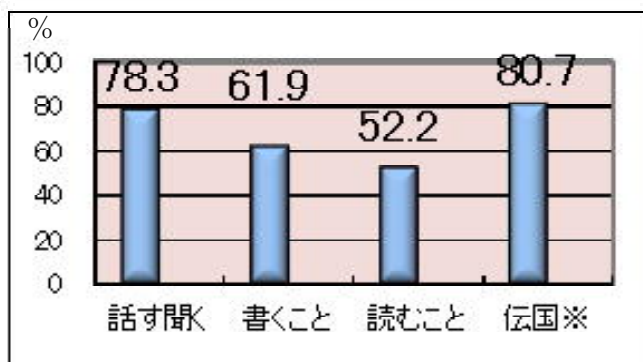
中学1年



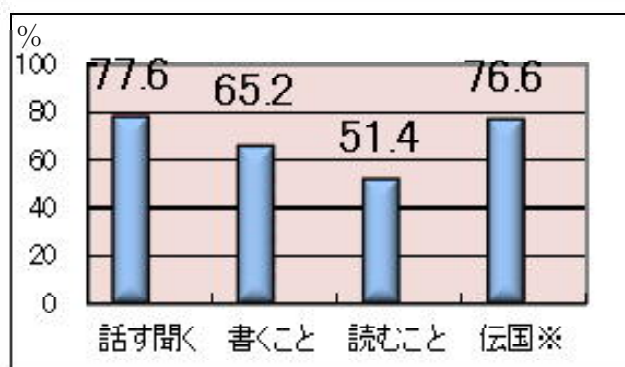
(4) 教科別の状況

国語

小学4年



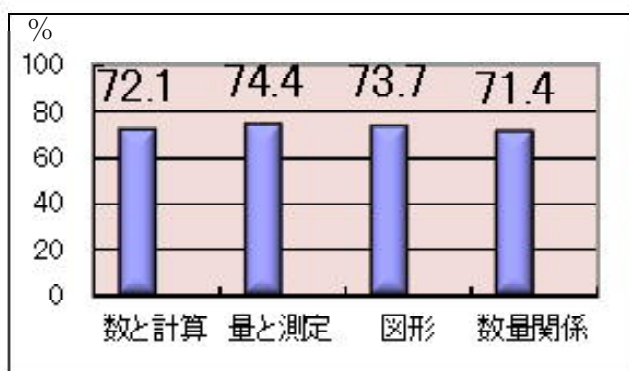
中学1年



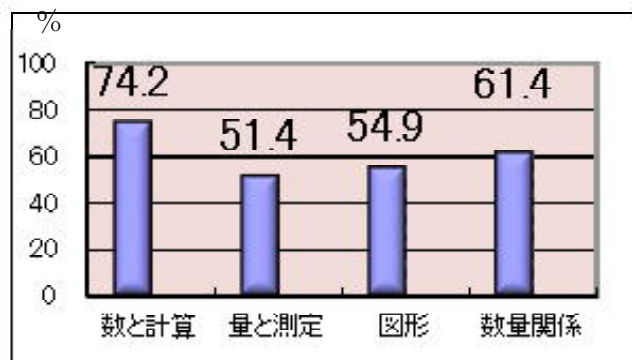
※伝国・・・伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

算数・数学

小学4年



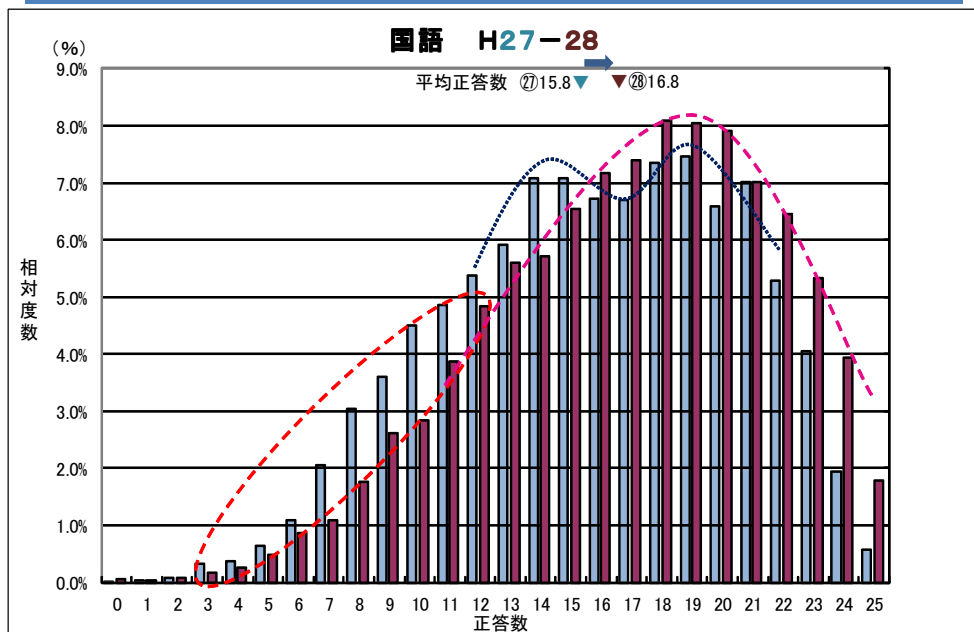
中学1年



1 前年度の正答数の相対度数分布と今年度の正答数の相対度数分布とを比較すると、小学校4年国語と中学校1年数学において、学力低位層が減少した。

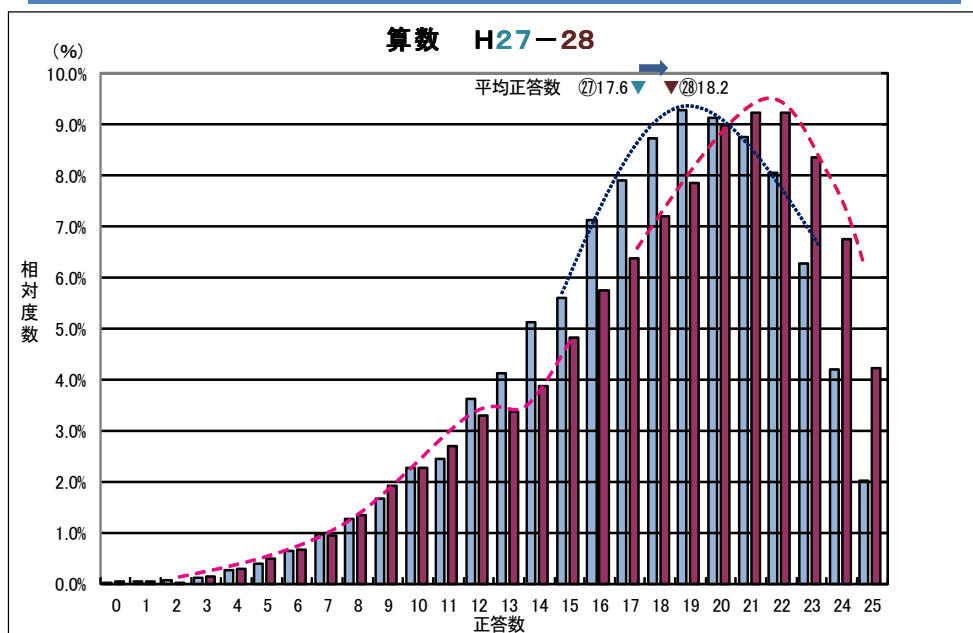
小4年

平成28年度府学力診断テスト(小4) H27-28 相対度数分布



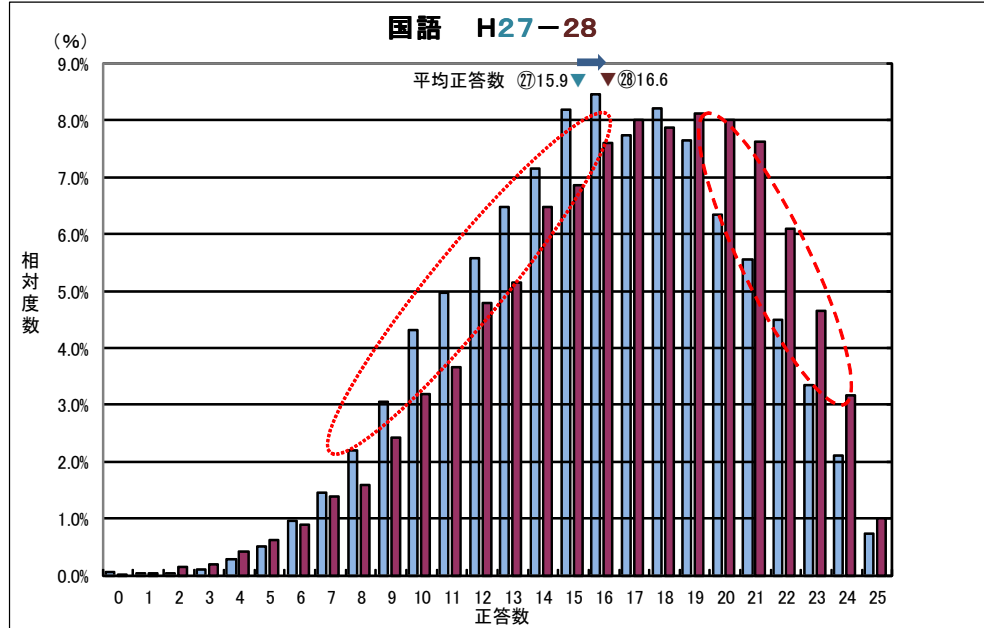
平成28年度小学校4年の国語については、昨年度見られた二極化の傾向が解消し、頂点が高得点寄りの山形に改善した。平均正答数が1.0ポイント上昇しており、平均点が上がっていることを考慮しても、低位層から中位層にかけて基礎学力の定着が図られたことが見て取れる。

平成28年度府学力診断テスト(小4) H27-28 相対度数分布



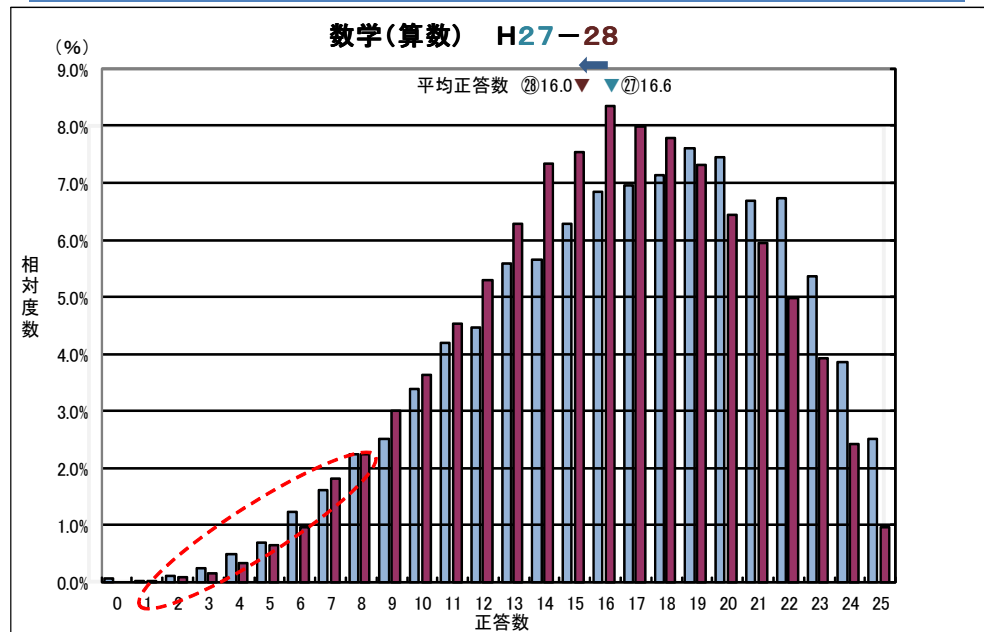
平成28年度小学校4年の算数については、分布の山形の頂点が高得点寄りに移動しており、全体的には学力の向上が見て取れる。正答数が昨年度より0.6ポイント上昇している。しかし、低位層については、大きな改善は見られていない。

平成28年度府学力診断テスト(中1) H27-28 相対度数分布



平成28年度中学校1年(入学時)の国語については、中位層の低部が昨年度よりも減って中位層の上部が増えており、基礎学力の定着が進んだことがわかる。平均正答数が昨年度より0.7ポイント上昇している。

平成28年度府学力診断テスト(中1) H27-28 相対度数分布



平成28年度中学校1年(入学時)の数学(算数)については、平均正答数が昨年度より0.6ポイント下降しており、問題がやや難化したと考えられるが、低得点の生徒の割合が減少しており、学力低位層の下支えが進んでいることが見て取れる。